

日中韓 3 カ国学術交流の報告

副会長／国際学術交流促進委員会委員長 金子 光一（東洋大学）

これまで新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から非対面でしか実施できなかった国際学術交流を、今年度は対面で実施できたことを大変嬉しく思う。日本が幹事国として対面で日中韓三カ国代表者会談および国際学術シンポジウムを開催するのは、2018年度に金城学院大学で開催して以来5年ぶりである。

大会前日（10月13日）17時から代表者会談が吉祥寺エクセルホテル東急で行われた。そこでは、今後の三カ国（日中韓）学術交流の進め方について議論した。まず、覚書の更新時期は、来年度（2024年度）であるが、それに向けて各国で内容の精査を確認した。また、来年度幹事国となる中国に対して、代表者会談と国際学術シンポジウムの開催の準備を依頼した。シンポジウムのテーマは、少子・高齢社会が抱える課題等、共通に議論できるものを選定する方向で検討することを確認した。会談終了後、本学会の理事・名誉会員と中国・韓国からお越し頂いた先生方との懇親会をもつことができた。三カ国の代表者が対面で相互に交流の機会をもてたことは大きな喜びであった。

大会初日（10月14日）10時から留学生および留学生を指導する教員のためのワークショップを開催した。今年度は、これまでのワークショップの趣旨を踏襲して「社会福祉研究・教育における多文化共生（2）～韓国・中国における留学生、少数民族、文化的マイノリティ等の多様な学生の受け入れ及び対応の現状と課題～」というテーマで行われた。中国からは長春工業大学の高春蘭氏に、韓国からは慶尚国立大学の任貞美氏にご発題頂いた。その後、11時10分からグループワーク・ディスカッションを行った。全体のコーディネーターは、ヴィラグ・ヴィクトル委員と黒田文委員にご担当頂いた。

大会二日目（10月15日）9時30分から「幸せな生活を支えるために社会福祉に求められるものは何か」というテーマで国際学術シンポジウムを開催した。発題者は、日本代表が本学会前会長の木原活信氏（同志社大学）、韓国代表が江南大学の金修完氏、中国代表が華東師範大学の黄晨熹氏であり、コーディネーターは、所めぐみ委員と浅野貴博委員に務めて頂いた。地球温暖化をはじめとする自然環境の変化や新型コロナウイルス感染症の拡大等に伴い、私たちの生活を取り巻く環境は地球規模で大きく変わりつつある。そのような中で、改めて「一人ひとりの幸せな生活とは何か」を考え、それを支えるために社会福祉に何が求められているのかをそれぞれの国を代表してご発題頂いた。各国の現状を踏まえた課題が多角的なアプローチから浮き彫りとなるシンポジウムであった。

大会に向けての準備作業の段階から登壇者の決定に時間を要してしまい、関係の方々に多大なご迷惑をおかけしたが、国際学術交流促進委員および会員、大学院生の皆さまのお力添えにより、無事に終えることができた。

ご協力頂いた方々にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。